玉田教士の
BUILDER'S SPIRIT
ビルダーズ・スピリット　熱き工務店の群像

03 株式会社エー・ディーアンドシー

「気持ちがいい」の哲学性。天然ロハス企業が突き抜ける、21世紀型ビルダー像の新地平。

文：建築プロデューサー　玉田教士（LDK inc 代表）
写真：長谷部均

古いビルをリノベーションした青山にある「CAFE246」の施工例

The Works of a'D and C

内装屋と建築屋の棲み分け

職人といえば、「家をつくる人」。一般にはそのようなイメージで捉えられていて、内装屋と建築屋という別の種類の生き物が、業界を棲み分けているということを知っている人は案外少ないかと思います。イルカとマグロのように、形は似ていても全く別の生き物。内装屋と建築屋は、考え方や仕事の手順に大きな違いがあるのです。建設会社や工務店など の建築屋は、法令の範囲内で安全な建物をつくる義務があります。したがって建築屋には専門の課程で勉強したという経歴の証明と種々の資格が要求されます。一方、内装屋は、特に厳重な資格が必要なわけではありません。その分おびただしい種類の素材に対する知識、機転、そして何よりもセンスが必要になります。

案外知られていませんが、建築屋と内装屋は仲が良くないのです。

一般に大規模な工事などでは建築屋は本体工事を請負い、内装屋はテナントの工事を請け負います。両者のクライアントもそれぞれ別。建築屋はデベロッパーから、内装屋は店舗出店者から、それぞれ発注されることになります。リスクを回避したいデベロッパーの立場と、自由に出店をしたいテナントの立場は常に緊張関係にあります。したがって建築屋と内装屋の利害も自動的に衝突し、対立する関係にある。案外知られていませんが、建築屋と内装屋はとても仲が悪いのです。

本当は二つの業種の機能を併せ持つ会社にしてズがあるのかもしれない

いつも感じることですが、建築や内装の仕事では、安全性や建築法規、コスト、耐久性など自由を制限する要因と、デザイン性や存在感など自由を主張する要因が、いつも拮抗し矛盾しています。どんな仕事でも矛盾を突破しなければ、"いいもの"にならない。昔の言葉で言うならば"一筋縄ではいかない"のです。

自由を制限する要因には、専門知識と資格が要る。自由を主張する要因にはセンスが必要。従来の建築業界はこの二つの要素を建築屋と内装屋に分業させて、吹き上がってくる問題点を"後付け"で処理する形態を採っていたのかもしれません。

しかし、本当はこの矛盾律を両方とも一旦取り込んで、昇華した解決策を提示できる企業。それが21世紀型の新しい建築業のイメージだと思っています。ここが重要ポイントなのです。

デザインリフォームという仕事のむずかしさと可能性について考えてみる。

たとえば、デザインリフォームというカテゴリーについて考えてみる。自由の制限と自由の主張という二つの要素、その矛盾の昇華が"心地よい空間造り"の条件という意味では、デザインリフォームはまさにその典型例です。リフォームは、対象物件の建築構造や配管ルート、電気系統などの高度な知識が不可欠です。また、制限されたスペースを愛着の持続する空間に変化させるバランス力やセンス、素材の知識が同時に要求されます。

自由の制限と主張、この矛盾を突破するポテンシャルの見極めが、ビルダー選びのポイントと言えると思います。今回は、そのような観点から内装業を出発点に総合的に伸びていこうとする若々しい企業を紹介しましょう。

エー・ディーアンドシーの仕事には"自由"ということばの意味を再認識できる清々しさがある。

エー・ディーアンドシーは今年で創業10年になる売れっ子インテリア企業。デザイン物件の設計から施工まで総合的に提案する新しいタイプの企業です。デザインリフォームや最新の飲食店、アパレルのデザインや施工だけでなく、ライフワークで幼稚園の仕事を続けていたりする。落ち着きと運動性、両立することの難しい二つの要素のバランスをいつも感じさせてくれる会社です。自由な空気感も手伝って、エー・ディーアンドシーは今、いろんな人たち、職人や設計者、デザイナーが出入りするプラットフォームになっています。まさに梁山泊です。

会社を作るきっかけは塗装職人だった代表の荒川さんが、大工をやっていた土方さんと意気投合したこと。ミュージシャン同士がアドリブでセッションを始めるように、極自然に会社が出来上がりました。

職人魂と"FREE&EAZY"エー・ディーアンドシーのオフィスには既存の枠にとらわれない、自由な空気が満ち溢れています。そこに土方さんの下で現場を納めてきた川合さんを現場監督としてコンパートすることで、施工のレベルを高め、更に大手インテリア会社に勤めていた屋宜さんが加わって、落ち着きや合理性が加味されたバランスのいい体勢が整いました。

いわゆる"組織"ではなく連合体のような枠を広げていくこと。エー・ディーアンドシーのメンバーが大切にしていることは、マニュアル漬けになった大手企業の対極を行くものなのです。

「気持ちのいいこと」を大切にする、メンバーはほとんどサーフィン好きです。

メンバーにサーフィンをしている人が多いことも、エー・ディーアンドシーのオフィスが心地よい自由な空気感に満たされている理由のひとつかも知れません。"気持ちのいいこと"を知っている人たち、そんな安心感がクライアントにも生まれるだろうと想像できます。代表の荒川さんもサーフィンだけでなくフライフィッシングにもハマっているそうです。内装業の特徴で、さきほど"センス"と表現したバランス感覚。すなわち自然体で「気持ちのいいこと」を体で知っているということが、デザイナーの名前をたくさん知っていることより何倍も大切だということを、この人たちは分かっているのです。空間の提案や素材選びも、彼ら独自の快楽原則から肩肘張らずに生まれて来るのでしょう。

"ものづくり"の魂。身体感覚でやっていいことと悪いことを知っていること。謙虚なプライドとリーダーシップ。

職人であった荒川さんはやっていいこととダメなことを、身をもって知っています。当節CADで味気ない図面を描く設計者に、素材の特性や使い方のセオリーを教えることが忙しいそうです。「試してみること」。新しいことにチャレンジする人は、必ずこのプロセスを踏みます。内装で言えば、サンプル作り。これが自分たちのデザインの言葉（素材）を豊かにしていく上での命です。その蓄積から勘が働くようになり、やっていけないこととダメなことが、はっきり分かってくる。

"自由なデザインの発想と押さえどころのメリハリ"。エー・ディーアンドシーのように、この問題意識を持っている経営者のいる会社が、新しいビルダーのイメージなのです。

言葉は知らなかったけれど、この会社は天然ロハスでした。

荒川さんは最近、自分たちの出すゴミや余った材料が、あまりにもったいないので、同業他社とのネットワークでこれらを有効活用する方策を模索しています。ケミカルな残材を土に埋めてしまうような処理場の現状をいつも見ていると、自分にとって「気持ちが良くない」のだそうです。しかも「そのような処理場の現状を知っているのは、設計者でもなければデザイナーでもない。自分たち業者だけなんです。だから僕たちで何とかしないといけない。」と彼は言います。そう考えると必然的に提案する材料も天然素材が多くなるとの事。別に世界平和を考えているわけでもなく、自然体に話す荒川さんの口ぶりに、とても実感の籠もったリアリティーを感じました。

仕事に鍛えられて、それでも前向きに自分と向き合ってがんばってきた人。この人たちがつくる「良心的なもの」は行政の規制や官製のシステムにつくられたものを超えて、はるかに時代のニーズを反映しているヒトに優しいのです。

このような会社にコンピューターばかりやっている若いヒトがたくさん集まって、自分と社会の良好な関係を極自然に身につける。是非そうあって欲しいものだとしみじみ感じました。それが、建築業の勤めなのかも知れません。

家具ショップとのコラボレートで材料をインドネシアより輸入し、パリの高級ビラを演出

銀座にある寿司屋の一部をVIPルームに改修。そのアプローチ部分

テナントビルのリノベーション。床を抜くことでメゾネット・タイプに改修

木造住宅をリノベーション例。2階はそのまま住宅に、1階はオフィスとして利用

築30年の木造住宅をリフォーム。材料は余材や廃材を利用し極力コストを低減

一軒家をリノベーションしたエー・ディーアンドシーのオフィス

株式会社エー・ディーアンドシー
代表者／荒川浩司
所在地／東京都世田谷区北烏山9-2-6
☎03-5315-3519
E-mail:mail@adandc.jp
http://www.adandc.jp/

玉田教士
LDK HOME STYLE DESIGN
http://www.ldk.co.jp/